

40514

教科書文庫

4
110
41-1923
20000 66639

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

**Kodak Color Control Patches**

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM Kodak



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

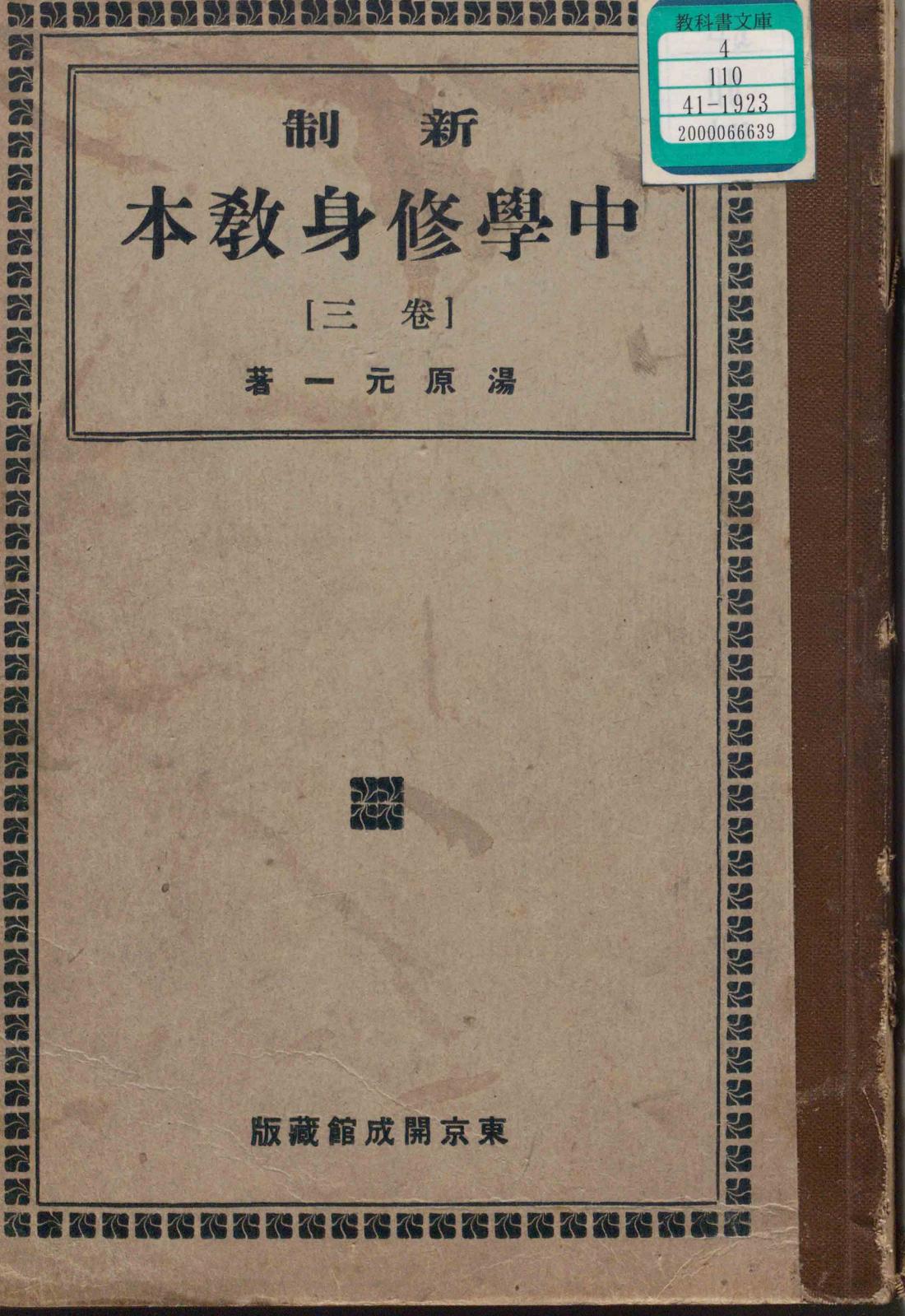
中學修身教本

[三卷]

著一元原湯



東京開成館藏版



4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

資料室

濟定檢省部文

用科身修校學中 日五十二月一年二十正大

教科書文庫

4

110

41-1923

2000066639

制新
本教身修學中

[三卷]

著一元原湯

広島大学図書

2000066639



版藏館成開京東

42
110
大12

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ
智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義

勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセんコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ

抑、我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淳礪ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

勅語

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ惟神ノ寶祚ヲ踐ミ爰ニ卽位ノ禮ヲ行ヒ普ク爾臣民ニ誥ク

朕惟フニ皇祖皇宗國ヲ肇メ基ヲ建テ列聖統ヲ紹キ裕ヲ垂レ天壤無窮ノ神勅ニ依リテ萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ

皇考維新ノ盛運ヲ啓キ開國ノ宏謨ヲ定メ祖訓ヲ
紹述シテ不磨ノ大典ヲ布キ皇圖ヲ恢弘シテ曠古
ノ偉業ヲ樹ツ聖德四表ニ光被シ仁澤遐陬ニ霑洽
ス

朕今不績ヲ纊キ遺範ニ遵ヒ内ハ邦基ヲ固クシテ
永ク磐石ノ安ヲ圖リ外ハ國交ヲ敦クシテ共ニ和
平ノ慶ニ賴ラムトス朕カ祖宗ニ負フ所極メテ重
シ祖宗ノ神靈照鑑上ニ在リ朕夙夜兢業天職ヲ全
クセムコトヲ期ス朕ハ爾臣民ノ忠誠其ノ分ヲ守

リ勵精其ノ業ニ從ヒ以テ皇運ヲ扶翼スルコトヲ
知ル庶幾クハ心ヲ同クシ力ヲ戮セ倍國光ヲ顯揚
セムコトヲ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

五箇條ノ御誓文

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人
心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘ
シ

一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘ
シ

新中學修身教本 卷三

目次

一 人物の眞價	一
二 五つの讀書法	一
三 學校は到る處にある	三
四 小說の利害	六
五 責任の觀念	二
六 油斷大敵	四

- 七 利用を怠るな
八 流行を追ふのは是非
九 自然に返れ
一〇 合理的生活
一一 禮儀と作法
一二 相互の尊敬
一二 公德
一四 悪の摘發と善の顯揚
一五 同情心
一六 雅量
一七 施恩と返恩
一八 氣韻と我が國民性
一九 愛郷心と愛國心
二〇 義勇奉公
二一 明治天皇(上)
二二 明治天皇(下)
二三 明治天皇(下)

八
八
八
八

一〇〇
一〇〇
一〇〇
一〇〇

新制中學修身教本 卷三

湯原元一著

一 人物の眞價

普通にいふ人物即ち偉い人とは何ぞ。官途に立身し、實業に成功し、學術に貢獻したものなどは、世の謂はゆる偉い人である。これらの人は、多く才能力量が人にすぐれてゐるに相違ないけれども、悉く偉い人であるとはいへぬ。眞に偉い人は、まづ人としての價值に於て萬人に優れてゐなければならぬ。しかば人としての價值は

偉い人とは
何ぞ

人としての價值
全体として見ての人の
偉いれて居らぬば
あらぬ。

標準
一、財産名譽
彼ハ何ヲ有ツカ。

遮滅説
一代説
新制中學修身教本 卷三

二

二、知識才幹
彼ハ何ヲ有ツカ。
(明治時代)

三、力量技能
彼ハ何ヲ能クスルカ。
(明治時代)

四、人格

何を知るか
知識の樹は生
活の樹ではな
い。
(バイロン)

何によつて定めるか。
「彼は何を有つか。」これが往々人の價值を定める標準になつて、名譽、財産などを有つものは、多く偉い人と呼ばれてゐる。名譽や財産は人を幸福にするのが常であるけれども、名譽でも財産でも、必ずしもその人の才能、力量で得たものでないことも多いから、これで人の價值を定めるのは、恰も太陽の光の反射に過ぎぬ月の光を月自身の物と見るのと同じ誤に陥ることがある。

「彼は何を知るか。」これによつて人の價值を測る標準とすることは、前のものよりも一步進んだ考である。「知識は力である」とベーコンがいつたやうに、知識は實に人

何を能くす
るか

を有力にするものである。しかし、知識は必ずしも人を善良にするものでない。且知識はこれを實行に現さねば何の役にも立たぬ。それゆゑ、たゞ知識の多少をもつて人の價值を定めるときは、人は到底百科辭典には及ばぬといふ結論に達するのである。

それでまた人の價值は、「彼は何を知るか。」でなく、「彼は何を能くするか。」を見て定めるべきものと説く人がある。この説は知よりも行に重きをおいたもので、前の二つの中のより更に一段進歩した考である。しかし、この説に従へば、人の價值を主としてその爲す仕事の分量によつて測るといふ缺點を免れぬ。そしてその結果は、いかに

勤いても人は機械ほどに仕事をすることが出来ぬから、偉い人でも機械には勝てぬといふことになる。

知と能とはその人に固有するものであるけれども、そこの人の有つてゐるすべてではない。しかるに人の價值といふ以上は、その人の全體の評價でなければならぬ。思ふだけでは足りぬ、應用せねばならぬ。思ふだけでは足りぬ、實行せねばならぬ。

(ゲー) 知識、才幹の必要

造佛不入龍
画龍不點睛

かなる人格であるか」といふ間に答へることによつて人の價値を定めねばならぬのである。名譽、財産、知識、才幹は何ほど備へても、人格として缺ける所があれば、その人は謂はゆる佛を作つて魂を入れぬものであるから、

眞に偉い人とはいはれぬ。よし一時偉い人と思はれて

満極的
所謂善人

積極的
進之善者

人皆善す

偉い人

有天爵者

仁義忠信

無不善不儀

此天爵也

公卿大夫些些皆

天爵也

而人爵從之

今夫修其美節

皆人爵也

既得人爵

而棄天爵

則惑之甚者也

(孟子)

善人

評價の標準
を誤るな

も、やがてその性行に缺陷を生じて世の信望を失ふものである。

かやうに眞に偉い人は、人格に於て優れてゐなければならぬ。言葉をかへていへば、道徳に缺ける所があつてはならぬ。しかし、人格の優れた人とは、たゞ悪いことはせぬといふだけでなく、進んで善いことをして、世のためにになるには、知識、才幹も備へねばならぬが、それよりも更に最も大切なのは人格である。

それゆゑ、偉い人はその事業に於てよりも、その精神に於て優れたところがなければならない。事業はいかに大

きくても、精神が卑しければ、偉い人とはいはれぬ。精神に於て優れてゐれば、事業は大きくななくても、また或は失敗しても、偉い人といつてよい。昔は主として官途に立身したものを偉い人と思つたこともある。今日でも權勢、富貴の人ばかりを偉い人と思つてゐるものが少くない。これらはいづれも人物評價の標準を誤つたものである。我等は偉い人になることを心がけるとともに、よく眞の偉い人の何であるかを知つてゐることが肝要である。

二 五つの讀書法

我等の學ぶべきことは、自然にも社會にも限なくある。しかし、その材料は雜然として謂はゆる玉石混淆の狀態にある。しかるによい書籍の中に記された事柄は、恰も濾過された清水のやうに、多くは直ちに我等の用に供することが出来る。就中東西聖賢の名著は、宇宙の眞理を窮めて人間の正道を明らかにしたものであるから、その一言一句でも皆我等の心を養ふ糧とならぬものはない。我等はもとより創作、發明に努めねばならぬが、その材料までもすべて我等の獨力で作り出すことは到底むつかしいのである。世の創作、發明と稱するものを見れば、その材料は多くは必ず昔から存してゐるものを利用し

創作及發明
テモ讀書が
ゆ要ナリ。

心の糧	自然及び社會と書籍
創作、發明 と讀書	昭憲皇后御歌 よる光る玉も なにせん身を 照すふみこそ 人の寶なりけ れ

て、たゞこれを新しい意匠によつて新しく組立てたものである。しかもこの新しい意匠も、他の何人かの影響を受けてゐないものは極めて少い。それゆゑ、エマーソンは原作と引用とを論じて、「己自ら賢明なる人ほど最も書籍を尊重する人である。廣い意味に於て、吾人は世に純粹の原作はないと言ひ得るほどに、すべての人は引用するものである」といひ、また孔子は一方に於ては、古語を引いて、「これ日に新に、日に日に新に、又日に新なれ」と教へながら、他方に於ては、「古きを温ナラフねて新しきを知れば以て師となるに足る」と說いてゐる。我等に讀書の必要であつて、いかに文字上の知識を輕視する教育法でも、讀書を全

六、自然及社会ト書籍ト比較

- ① 二、創作及
聲明ト讀書
- 三、讀書ノ恩惠
- 四、讀書法
- 五、正シキ
讀書法
- 六、出版物
ニ對スル讀書法

廢することの出來ないのは、實にかかる理由に基づくのである。

讀書の恩恵は極めて大きい。身は一室に坐しながら、古今東西の碩學、鴻儒と心の交を結び、まのあたりその談論を聞くことが出来る。慰藉の言もあれば、激勵の語もある、また我等の蒙も啓いてくれゝば、疑も解いてくれる。しかもその中にある名論、卓説を隨意にとつて己の物としても、誰もこれを咎めはせぬ。昔は學校の設が今日のやうに十分でなかつたけれども、隨分立派な學者や人物を出したのは、讀書の便宜だけは當時にも相當につたからである。今日でもさほど長く學校の教育を受

書讀めば昔の
人はなかりけ
り皆今もある
我が友にして
(本居宣長)

けぬにも拘らず、學問に上達し、事業に成功する人の少くないのは、おもに讀書の恩恵によるのである。

讀書の利益はかやうに大きいが、その方法を誤れば却つて弊害を生ずるものである。多讀して徒らにその博識を衒ひ、虛名に誇らうとするのはその一で、粗讀して深く心に會得せず、謂はゆる口耳四寸の學をなすのはその二で、濫讀して卑俗な書にまで及び、自己の品位を傷つけるのはその三で、妄讀して判断の自主を失ひ、書を讀むのではなくて、書に讀まれるのはその四で、貪讀して徒然に思想を混亂し、心身の健康を害するのはその五である。

右の弊害に陥らぬやうにするには、多讀に對して專讀法

誤った讀書法
小人學也、
入乎耳出乎口耳間則浮矣。
是正以美之。
七尺之筋哉。

正しい讀書法

心讀

我を以て書を觀れば、隨處に益を得るも、書を以て我を博くすれば、卷を釋いて茫然たり。

し、粗讀に對して精讀し、濫讀に對して選讀し、妄讀に對して考讀し、貪讀に對して慎讀することである。これを約言すれば、目讀でなく心讀でなければならぬ。心讀して紙上の知識を腦中の物となし、且これを實用に供し得るやうになつて、こゝに始めて讀書の効果が遺憾なく現れるのである。

なほ印刷術の進歩には書籍濫造の弊を伴なふものであるから、特に今日では書籍の選擇にも十分の注意を拂はねばならぬ。書籍の選擇を誤ると、讀書から受くる悪い影響は、讀書の方の宜しきを得ないよりも一層甚だしいものである。

三 學校は到る處にある

Passive 受動的
Active 能動的
自然と社會
能動的
自覺的
自律的
自学自習
廣い意味
他律的
所謂學校
學生

自然と社會
宜しく宇宙を
讀むがよい。
宇宙は眞理の
友である。
(ヤング)

學校

學問はたゞ學校と教科書とだけでするものであると思ふのは誤である。學校は到る處にある。自然も社會も大きな學校で、また大きな教科書である。しかも、これは謂はゆる學校や教科書よりは内容にも富み、程度も高い。この大きな學校や教科書は常に我等的眼前に存在してゐるのに、我等の多數はこれによつて學ばうとはせぬ。たゞ學校に通うてその教科書を讀むことだけが學問であると思ふものが少くない。學校用の教科書は實は人間の有する知識、技能の拔萃で、しかもその複寫であ

つて、その實物はいづれも自然と社會とにあるから、我等は常にこの自然と社會とを看過してはならぬ。自然と社會とこそは實に我等の最後に卒業すべき最も高等な學校である。

しかし、この學校には特定の教師がないから、我等は注意と努力とによつて、自学自習して知識、技能を收得せねばならぬ。よく注意しよく努力すれば、我等は自然と社會とで學問することが出来る。動物、植物、礦物等は、遠足、旅行の際にも可なり多く學ぶことが出來、歴史、地理の材料も、氣をつけければ到る處で得られる。物理、化學の應用も幾分は家庭の生活で試みることが出来る。その他、特

一、學難防禦法
二、圖書館ノ矣ニ達著ニ計
三、検定制度(改正)

新制中學修身教本 卷三

一四

學校教育

に一般教育のために設けられた博物館圖書館等を利用すれば、更に多くの知識、技能が獨力で得られるものが多い。

第一、家庭ニ家庭と社會

例、公德

於テ道徳ノ基礎

筆者名、人ニ迷惑ヲカヘル

過疎

自然につい

て學ぶ方法

集慈心

所有欲

虚妄ノ判断

道徳的本能

第一は家庭であつて、我等の道徳の基礎はこゝで築かれる。次は社會であつて、我等は世の中の實際生活によつて始めて道徳を體得するのである。社會は、道徳上せねばならぬことと、してはならぬことを、その因果應報の例までも添へて、懇に我等を訓誨するものである。

平生我等の眼に觸れ耳に入るものは、悉く學問の助となるものである。例へば、路傍に於て一箇の珍しい植物を見つけたとすれば、その名稱、性質等を考へ、わからぬ點

積極的—シテハナヌ、積ム、—セネバナヌは教師に質し、または書籍で調べなどして、その結果を一まとめ置くといふやうにすれば、植物の知識は次第に進歩するものである。かゝる方法を、學問上ばかりではなく、修身處世の上にも適用すれば、自然と社會とは、我等のために大きな學校ともまた大きな教科書ともなるのである。

昔も今も何等學校の教育を受けないにも拘らず、學問に事業に大いに成功した人が少くない。謂はゆる自成の人がある。自成の人は學問をしない人ではなく、その學問を普通の學校用の教科書でしないで、讀書の外は専ら自然と社會との大きな活きた教科書によ

自成の人

予は誰に對しても開かれてゐる天地以外には、何等の書物も持たなかつた。(パリッシャー)

つてして、しかも最も高等で且最も困難な學校を卒業した人である。

修身ノ敵

正シイ心(良心)
正シ行(善行)

正邪判断

人間トシナ
ルスペキナリ

修養
善ヲ知ル判断
善ヲ愛シ
善ヲ憎シ
善ヲ行フ

修身と小説

四 小説の利害

修身は正しい心や善い行のいかなるものであるかを知説いて、我等が悪を避け善に就くには、いかにその心を用ひ、またいかにその身を處せねばならぬかを教へるものである。しかるに、小説はかかる道徳的教訓を主とするものでないから、人物を取扱ふのにも、たゞ正しい心や善い行ばかりを選ばないで、人間をありのまゝに描き出すものである。随つてその中には人間の悪い心や醜い行

人の心の奥に
光を送るのが
藝術家の役目
である。
(シーマン)

も遠慮なく暴露されることが多い。それゆゑ我等は小説によつて世態、人情を學ぶことは出来るが、道徳上には往々悪い感化を受けることを免れぬ。

善を知り、善を愛し、善を行ふことが、修養の目的であるから、修養を主とする青年期に於ては、特に惡に遠ざかり、善に親しむやうに心がけねばならぬ。小説によつてあまりに人生の暗黒面を窺ふと、我等の心までがそれに引入れられる恐がある。それゆゑ、孔子は「禮に非ざれば視ること勿れ、禮に非ざれば聽くこと勿れ、禮に非ざれば動くこと勿れ」と教へてゐる。これは惡を惡として嫌ふやうになるには、まづ善をもつてその心を固めておかねば

大學の法は、
之を未發に
禁す、之を豫
と謂ふ。
(禮記)

小説の害

人の品格は、その讀むところの書籍によつてこれを判する。これは、恰もその交るところの朋友によつてこれを判する。やうなものである。(スマイルス)

突

實際との衝

ならぬから、平生なるべく悪いことに近寄らぬやうにせよとの意味である。

また小説の中には、多く實際と懸離れた想像の世界が描かれてあるから、もしこれを信じてそのとほりに實行しようとなれば、實際の世間と衝突して、不平不満に堪へないことが起る。且あまり想像に耽ると、意志の力が弱くなつて、勤勉努力を厭ひ、物事を冷靜に考へることが出来なくなる。我等は元氣の旺盛な青年期に於て、他日のために大いに勉強せねばならぬのに、この大切な時期を無益、否、有害に経過するやうでは、將來の成功はおぼつかない。世には往々小説のために一身を誤る青年もある

から、我等は深く自ら戒めねばならぬ。

たゞし思想が健全で青年に適する小説は、閑暇の時にこれを讀むのはさしつかへがない。また深遠な思想を含んだ大家の小説は、その眞意を玩味するのに相當な學識と經驗とを要するから、これらは年長じた後に讀むがよい。たゞ絶対に讀んでならぬのは、その思想が俗悪で、且危險である小説である。しかし、無數の小説の中から適當なもの選擇することは容易でないから、これについては、必ず父母や先生の指圖に従はねばならぬ。

よい小説

藝術は人生の
パンでなく、
その酒であ
る。(エアン・
パウル)

眞の藝術は人
の心を落著か
せ平和にする
ものである。
(ゲルカエニ
ース)

よく擇べ

五 責任の觀念

責任の意義

へ自らナキベキ化勢ヲ自ラ引キ受ケルコト

六化カラ更ハサレタ仕事ヲ自ラアリテ司ヤ復ケルコト。

新制中學修身教本 卷三

二〇

責任觀念

とは何ぞ
君子はその位に居れば、則ちその官に死ふ。(韓愈)

へ鳥カニテナ

對ニシテ責任ナラス。

責任の觀念
（居れば、則ちその官に死ふ。）

筆ヲ委仕ツシテ果サウトスル。

引受けた一定の任務がある。これをその人の責任といふ。

この責任を果さうとする心が、即ち責任の觀念である。

今日は大小すべての仕事が共同でなされるから、一人でもその責任を果さぬものがあれば、その仕事は完全に成されぬ。各自任意の仕事でも、その成績は全體の仕事に影響する。例へば、我等の勉強は我等の任意にする仕事ではあるが、これを十分にすれば、たゞに我等各自の成績がよくなるばかりでなく、その學級その學校の成績もよくなる。これに反して、我等の或者がよからぬ行をする。

一、共同責任
二、個別責任
三、重作・轉授・因避
ナラス。

共同責任

れば、その學級その學校の名譽を損ずる。かくて我等は冥々の裏にその所屬の集團に對して責任を荷てゐる。かかる種類の責任を共同責任といふ。そして誰でもこの世に生存する限は、この共同責任を免れるわけにはいかぬ。共同責任は多くは明瞭に各人に割當てられた任務でないから、やゝもすれば忽せにされ易いが、社會の進歩、國家の隆昌も、もとは國民の各自がその所屬の集團に對する共同責任を重んずるところから起るものであるから、決してこれを輕視してはならぬ。

我等はかかる一般的な共同責任を負うてゐる外に、その位置、身分に應じてそれぐ各別に果さねばならぬ任

個別責任

務を有つてゐる。これを個別責任といふ。個別責任はその所在が最も分明であるから、もしこれを怠れば、その人は忽ち世間の非難を受ける。それゆゑ、この個別責任については、我等は一層よく注意する必要がある。

仁者は難きを先にして、獲ることを後にす。（論語）

すべて責任は全部これを己に引受け、少しも他に轉嫁してはならぬ。これを果すことが困難である場合でも、まづその罪を己に歸し、あくまで己を責めねばならぬ。

何か口實を設けて責任の轉嫁を圖るのは卑怯な振舞である。しかるに、今日の青年間には往々にしてこの弊風があつて、特に己の罪過を社會の責任に歸さうとする傾向が著しい。その極端なものになると、罪過はすべて社

責任の轉嫁

仁者は難きを先にして、獲ることを後にす。（論語）

責任を社會に歸する惡傾向

人格
独立自主
責任ヲ負フ

人間ハ價值
を無視す

會の缺陷から生ずるものであるから、人間はこれに對して少しも責任を負ふ必要がないと説くものさへある。この見方にも勿論一理がないではないが、かく極端に論じつめれば、人間は獨立自主の能力を有たないで、全くその環境に支配されるものになつてしまふのである。

それゆゑ、かかる見方によつて己の責任を免れようとするのは、これやがて自ら人間としての價值を無視するものである。人間の罪過に對しては、勿論社會もそれ相當の責任を有するが、我等はたゞ自ら省みて己の責任を感じすればよい。他に我等と責任を分つものがあるか否かは、宜しく第三者の判断に一任すべきである。否、功は

油断大敵

勵義

注意ヘテリ思ハ

新制中學修身教本 卷三

二四

故平盤 功は人に譲
れ經

他に譲り罪は己に負はうといふ覺悟があつてこそ、我等は眞に責任を知る獨立自主の人といはれるのである。

時は失す

得失の

失策の多い場合

明治天皇御製
浪風の静なる
日も船人は舵
に心をゆらさ
ざらん

山に登り流を溯るのは難いが、山を降り流を追ふのは易い。そして我等の失策は事の困難な場合よりも却つて多くその容易な場合に生ずるものである。顛覆覆没の奇禍が山に登り水を溯る時よりも、山を降り流を追ふ際に、より多く起るのは、即ちその例である。これは困難なことをする場合には、心が緊張して、十分に思慮をめぐらすが、容易なことをする場合には、おのづから心が弛み、

六 油斷大敵

安心から油

事に關する
油斷

注意を怠るからである。諺に、『油斷大敵』といふのは、かゝることを戒めたものである。
我等が始めて學校に入つた當座は、心もおのづから緊張してゐて、怠なく學業を勵むけれども、一度好い成績を得て、落第の恐がないと思ふやうになれば、とかく安心して、學業も次第に怠りがちになり、甚だしきはその操行までも悪くするやうになる。これまた油斷から生じた大敵であるから、我等は深く戒めねばならぬ。
何事かを企てる際に、容易なことを容易であると思ふだけならば、失策もさほど多くは起らぬわけであるが、容易であると思ふ心はとかく慢心を生じて、人に油斷をさせ、必ずこれに敗る。(荀子)

人に對する
油斷

知るは人を知
るより難きは
なし。(家語)

せるものである。初から心に油斷があつて事を企てれば、それに失敗の多く伴なふのは、むしろ當然である。油斷は事に關してよりも、人に對して更に一層悪い結果をもたらすものである。容易であると思ふ事がその實困難な事であることは、實際その事に當れば直ちにわかるが、與し易いと思ふ人がその實與し難い人であることは、容易にわからぬものである。人の心は元來測り知られぬもので、中には表裏の甚だしく相違する人もある。これは必ずしも悪い人と限らず、有徳の人にも隨分見られることがある。例へば、偉さうな顔をせぬから無能の人かと思ふと、その實は有能の人が謙遜してゐるといふ

難を避けて
易きにつく

道徳木
寒氣
ふい

やうなことが世間にはよくある。それゆゑかかる人を與し易いと思へば、意外な失策をする。また阿諛迎合の小人は與し易いやうに思はれるが、これに心を許せばいかなる禍に逢ふか測りがたい。しかるに、難を避けて易に就かうとするのは、人情の弱點であるから、とかくかかる與し易いと見える人物と親しくしようとするものである。それゆゑかかる場合にも、我等はよく油斷大敵の戒を守らねばならぬ。

元來得ることは難く、失ふことは易い。重荷を揚げるには渾身の力を用ひねばならぬが、これを放るのは何の苦もないやうに、多年努力の結果も、その人の心一つで即

功者難成而易失
時若難得而易失
(司馬遷史記)
失ふは易い
得るは難く
功は成り難く
して敗れ易
し。(史記)

座に消滅してしまふ。長い歲月と多大の勞費とをかけて出來上つた大廈高樓が、瞬く間に灰になつてしまふやうに、千萬長者でも一旦心が驕り運が傾けば、忽ち無一物になづてしまふ。學問もまたこれと同じく、あつばれの秀才も、一時の心得違から十年螢雪の功を空しくすることがある。これらもまたいづれも心が緊張を失うて、油斷をするところから起ることである。

絶對の安心
を許さぬ
人心一息の怠
あれば、天地の化と相似
す。

(薛文清)

人心有一息之怠
與天地之化不相似
古已有生活

奮闘生活

明治天皇御製
事なしとゆる
ぶ心はなかな
かに仇あろよ
りも危ひりけ
ず。

なふものと心得て、一層警戒を嚴にせねばならぬ。要するに、人間の一生は斷えず困難に打克つて行かねばならぬから、我等は學業についても修身、處世についても、決して片時も油斷をしてはならぬ。

七 利用を怠るな

およそ天地の間に存するもので、全くの廢物と視ねばならぬものはない。いかなるものでも、これを利用しようと思へば、利用されるものである。屑屋の拾ひ集める謂はゆる廢物でも、これを擇り分けて整理すれば、皆それまたその用をなすものである。焼棄てられたもの

六、廢棄ホリスト、大ケニス
七、利用を怠るなナメスルコト

第二學期
第四回 勵勉運動
強調キヤウ 世に廢物は
高調カイツ 間ない
不怠席、欠課、遅刻、早退
二字筆の筆傳
三四誌ムシキ 反省錄
四、内國品的書寫の堅牢
五、不用五
九、現文後

六金品
六場所
(室間)四時
五人

何かの取柄
がある

でも、灰になつて肥料となる。まして人間はいかにつまらぬやうに見えるものでも、必ず何かの取柄があるものである。

醜い小供についての話

西洋の話に、或畫家のところに、いかにも醜い子供を連れて、その肖像の揮毫を頼みに來た婦人があつた。畫家はこれを一見して、到底畫にならぬといつて断つたが、婦人が懇望して已まないので、これを引受けて、數日手元に預つてゐる中に、子供がちよつと笑ふところがいかにも愛らしく見えたので、畫家はすぐさまそこを書いて婦人に贈つた。ところが、婦人も今更のやうに己の子供の愛らしさを知つて、大いに喜んだ」といふことがある。我等

利用厚生

もこの畫家のやうな心持で人を見れば、いかなる人にも、必ず何かよいところを發見するであらう。

我等は平生廢物の多いのに苦しんでゐるが、しかし、これはその實は廢物が多いのではなく、我等が物を廢物にしてゐる結果である。昔の學者などは、學問のためであつても決して物をむだにしないで、例へば、詩文の下書などには古帳面の裏を返して用ひたほどである。そしてこれらは昔は物の浪費、濫用を天物を暴殄するものであるといつて、道徳上の罪と視たばかりでなく、儉約でもこれを利用厚生といふ大きな考からしなければならぬものと信じてゐたからである。今日我等が學用品などを取扱

天物暴殄

昔より人の捨
てざるなき物
を拾ひ集めて
民に與へん
(二宮尊徳)

整理整顿

一、金品
二、時
三、場所
四、空間
五、人

時間、場所の利用

ふにも、かかる心掛が必要である。何一品でも相當に金錢と労力と時間とをかけてゐないものはないから、これを大切にするのは道徳上の義務である。僅ばかりの金錢で買へるからといつて、これをむだに費すのは、たゞ金錢だけを見て、人の苦勞を察せぬからである。利用厚生とは、物の利用によつて人間の生活を幸福にすることで、單に金錢の節約を目的とするものでないから、この考があれば、我等はおのづから高尚な見地からして、何物でも必ず大切に取扱ふやうになるものである。

時間と場所とは、特に甚だしく無益に使用されてゐる。時間の利用の必要なことはいふまでもないが、場所もま

心の利用

たよく利用せねばならぬ。場所を利用するには種々の方法もあるが、特にそこに置く品物をよく整頓して、隅々までも使用の出来るやうにせねばならぬ。廣い室でも、品物の整頓が出来ねば、割合に餘裕のないものである。また空地を遊ばしておくことなども、今日のやうに地價の高い時代では一種の天物暴殄であるから、あくまでこれを利用せねばならぬ。

次にその利用の極めて必要なのは心である。懶惰、放縫、臆病などは己の損害となるはいふまでもなく、人にも迷惑をかけるものであるが、これらは心の利用を怠つたために出來た心の廢物である。元來心の力には限があ

る。これを無用のことに費せば、それだけ有用のことには用ひることが出来なくなつて、種々な心の廢物の生じて來ることを免れぬ。また必要な心の力でも、その用ひ方によつては却つて不利益になることもある。例へば、論語に、『伯夷、叔齊は舊惡を念はず、怨これをもつて希なり。』とあるとほりに、たとひ記憶は大切なものであつても、人の舊惡などは早く忘れた方がよい。その他、何の關係もないことまで氣にしたりするやうなことも、また心の利用を誤つたものである。

最後に擧げるべきは人の利用である。我等は常によく人の長所に注意して、これを利用せねばならぬ。この

師 人は皆我が
長所によつて人を使へ

心掛で廣く人に交れば、多くの人は我等にとつて教師である。論語に、『三人行けば必ず我が師あり。』その善なるものを選んで而してこれに従ひ、その不善なるものはこれを改む。』とあるのは、即ちこのことをいつたのである。また我等が他日何か指導者の位置についていた場合に、この心掛で人を使へば、人は各、その長所を發揮して喜んで働くものである。恰も醫師が無數の薬品をそれぐゝ病状に應じて處方するやうに、各自の長所によつて人を使へば、愚なものでも何かの用に立つものである。まして普通の人ならば、必ず一廉の役に立つことは疑のないことである。

善き流行は追々し時代順位
悪く流行とは人を社会に発達向上を妨ぐもの

益々きもの

悪く流行は追ふべきか
とほんよせ社会の進歩を妨ぐもの
流行を追ふ心をもともとを警戒し
流行を追ふの是非

習慣
流行と風俗

世間の流行には善いこともあれば悪いこともあるから、流行を追ふのを一概に悪事として排斥すべきではない。現在の風俗、習慣も多くはもと流行であつたものが漸次に固定して出来たものであるやうに、今日の流行でも、その善いものは必ず遺つて將來の風俗習慣となるのである。

一體人は流行を追ふまいと思つても、多少はこれを追はずにはゐられぬものである。例へば、流行せぬ品物はこれを買はうと思つても容易に買へぬから、嫌ひであつ

流行に反し
得ぬ場合

ても流行の品物を用ひぬわけにはいかぬ。またたとひこれを買ふことが出来ても、物によつては案外高價につくから、却つて不利益になる。手織の綿服は昔は質素の着物であつたが、今日ではよほど高價を拂はねば手に入れることが困難である。かかる事情もあるから、たゞ一般に流行を追ふのは悪いとばかりはいへぬのである。

悪い流行を追ふことは勿論宜しくないが、しかし、實際に於ては、悪い流行とは果していかなるものを指すかを知ることが容易でない。初め或物が流行し出した時には強い反感を抱いたものでも、間もなくこれを當然のことと思つて、平氣でこれに従ふやうになるものである。

流行の力

文化の進歩
と流行

流行が暗々の裏に人の心持を變へる力は實に大きいものである。今日でこそ普通な事のやうに思はれる東西諸國の風俗、習慣でも、一時は世人の反感を招いた歴史を持つてゐるものが多いのである。

しかば、流行に對しては道理は全く勢力がないかといふに決してさうではない。文化の進歩とともに、流行もあまり道理を無視することが出來ぬやうになる。今日の文明各國では、もはや野蠻未開の社會に見るやうな甚だしい不合理な風俗、習慣は行はれなくなつて、すべてが衛生的、經濟的及び道德的になつて來た。

かく大體に於ては、文化の進歩とともに、流行も漸次道

趣味に關する流行

理に合ふやうになる傾向はあるが、それでもなほ多くの弊害がこれに伴なうてゐる。特に趣味に關する流行には不合理なものが多い。元來人間の趣味は一概に衛生論や經濟論などで左右することが出來ぬから、趣味に關する流行には、昔からいづれの國でも多少の弊害が看過されてゐる。しかし、かの奢侈費澤の風などは、主としてこの隙に乘じて起るばかりでなく、趣味の流行には往々俗惡野卑なものがあつて、知らず識らずの間に人の品位を傷つけ德性を損ふから、我等はこの點については特に嚴正な批判を加へて、取捨を誤らぬやうにせねばならぬ。

學生と流行

最もその心
を戒めよ

明治天皇御製
ともすれば浮
き立ち易き世
人の心の塵
をいで拂は
ん

のに、斷えず變化する世の流行などに心を奪はれるやうでは、到底満足な修業は出來ぬ。西洋の諺に、「外面の流行は即ち内面の流行」とあるとほり、外形の變るたびに内心もまた變ることを免れぬから、あまりに流行を追へば、いつも心が動いて、それがために人格の確立もおのづから妨げられるものである。

しかし、元來我等が最も戒めねばならぬのは、たゞ流行を追ふといふことよりも、むしろその本である流行を追ふ心そのものである。好んで流行を追ふ心は、とかく人をして一般に輕佻浮薄な行に陥らせ易いものである。特に今日は善からぬ思想の流行も少くないから、すべて

流行に對しては、我等は一層その心掛を慎重にせねばならぬ。

九 自然に返れ

我が國民の物質的、精神的兩方面の生活が今日のやうに發展したのは、全く近來著しく進歩した文化の賜である。今日の生活と五十餘年前のそれとを較べれば、その便不便、快不快、利不利の懸隔は、實に天地霄壤の差があるといつてよい。衣食住の改善から交通機關の發達、その他一般的の文物、制度の整頓まで、一として我等の幸福を増進しないものはない。しかもそのためには國內の物だ

けでは満足が出来ず、進んで廣く世界の知識技術、物産までも輸入して、益々我が文化の進歩を圖つてゐる。我等はこの盛代に生まれ逢うた幸福を國家に對して深く感謝せねばならぬ。

過度文化と
都市生活

しかし、文化が進歩して生活が便利になり過ぎると、往往奢侈費澤の風が起つて、國民の氣象が輕浮惰弱に流れなるなど、種々な弊を生ずることを免れぬ。西洋ではこれを過度文化と名づけて、極力これを戒めてゐる。そしてこの弊は大都市に於て特に甚だしいものである。大都市の生活を永く續けると、多數の人はこれがために元氣を消磨する。そこで西洋では都市を人間の墳墓だとさ

新住者の活
動

へいつてゐるが、我が國にもそれに似た事實がある。現に東京、大阪などで盛に活動してゐるのは、多くは地方から新に出て來た人で、舊くからそこに住んでゐるもののが家は漸次衰へて行く傾がある。そのうへ現に活動してゐる人の家も、その子孫の代になると、また舊住者の後を追うて同じ運命に陥らぬとも限らぬ。

文化の意味はいろいろに取れるが、最もわかり易くいへば、文化は人間が自然を征服して贏ち得た結果である。例へば、蒸氣、電氣の發明によつて、廣い海をも渡り、高い山をも越えるといふやうに、今まで人間の仕事を妨げてゐたものを抑へて、却つてこれを人間の用に供するのが即

過度文化の
弊害

ち文化の力である。しかし、さうなると人間に抵抗するものが少くなつて、人間はあまりその體力を用ひないでよいやうになるから、遂には身體が弱くなつて、元氣も衰へる。特に大都市では交通機關が非常によく發達してゐるから、人は徒步することさへ少くなるといふやうに、すべて強く筋肉を動かせることがだんく減つて来る。そのうへ、日常生活に要する物資は勿論、娛樂の機關まで皆その必要以上に備つてゐるから、當然の結果として奢侈費澤の風が起り易いのである。そしてこれが實に都市生活が便利といふ甘い砂糖に雜せて我等に飲ませる毒藥であるから、都市の學校に學ぶものは、特にこの點に

過度文化の弊害
へ簡易生活簡易生活
二、郊外生活郊外生活
三、山歩跋涉山歩跋涉

四、健實旅行健實旅行
文化に罪はない

貨物生活

史

ついて大いに戒めねばならぬ。

しかし、かういへば文化や都市生活は一概に悪いやうに考へられるが、實は文化や都市生活が悪いのではなく、過度文化が悪いのである。それゆゑ、これに對する心得さへよければ、文化や都市生活は、我等にとつて利益はあっても、弊害などのあるはずのものではない。

しからば、我等はいかにすれば謂はゆる過度文化の弊を免れることが出来るかといふに、それは今日西洋諸國の識者の間に唱へられる「自然に返れ」といふ警語を實行することである。謂はゆる過度文化の弊は、人間があまりに文化を尊重して自然に遠ざかり過ぎたところから

自然に返る
方法

自然是物資のみならず特に多く元氣を與ふ。
(バックル)

理想は文質
彬々

生じたものであるから、その弊を矯める途も、やはり自然を忘れず、時々これに返る外はない。平生自然に近い簡素な生活を營む外、時としては人工に過ぎた都市生活を離れて、山河を跋渉し、自然に直接して、或はこれと親しみ、或はこれと鬪つて、質素堅實の氣象を養ふやうなことは、即ちその方法である。しかし、自然に返るとは、野蠻なことなどをするといふ意味ではない。孔子の言に、「質、文に勝てば野、文、質に勝てば史、文質彬々として然る後に君子なり」とある。これが我等の理想でなければならぬ。ただし、今日は過度文化の弊の漸く盛にならうとする時代であるから、我等の特に戒めねばならぬのは、野よりもむ

しろ史であることを忘れてはならぬ。

一〇 合理的生活

生活は向上
さすべきも

質素、儉約、勤勉、貯蓄、克己、制欲などの教訓に従ふと、人間の生活の程度は餘り上らぬ方がよいやうに思はれるけれども、その實はさうでない。生活の向上は即ち人間の向上であるから、出来るだけ衣食住を改善して、益、その程度を引きあげて行かねばならぬ。しかし、生活の向上は身體的欲望を満足させると同時に、精神的欲望をも満足させねばならぬ。言葉をかへていへば、生活の向上は必ず合理的、即ち道理に合うたるものでなければならぬ。大

飽食暖衣逸居して教なけれ
ば即ち禽獸に近し。
(孟子)

正常
病的
高能力
品位

廈高樓に住んで暖衣飽食しても、それが衛生的でも經濟的でも道徳的でもないならば、眞の向上とはいはれぬ。のみならず、物質的にこそ向上であつても、精神的にはむしろ墮落であるといつてもよいのである。さらばといつて、僅に飢寒に堪へるほどな切りつめた生活をするのが人間の道であると考へるのも、また道理に合はぬことである。もとより場合によつては、かゝるみじめな生活に甘んずる覺悟も必要であるが、これをもつて一般生活の標準としてはならぬ。人間の品位はたゞその精神的向上ばかりでなく、また物質的向上にも現れるものである。それゆゑ、人間の生活は道理の範圍内でこれ

を物質的にも向上させねばならぬ。

昔、孔子が顔回を評して、「賢なるかな回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り、人はその憂に堪へず、回はその樂を改めず、賢なるかな回や」といったのは、顔回の窮乏生活をほめたのではなく、窮乏のために學問の樂を改めなかつたその堅い志をほめたのである。孔子は決して強ひて人情を矯めるやうな極端な禁欲主義の人ではなかつた。彼は最も衣食住を重んじて、これに關する禮儀などを詳しく述いてゐる。それゆゑ、彼が「疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げてこれを枕にし、樂またその中にあり」といつたのは、「不義にして富み且貴きは、我に於て浮雲の如し」であるか

たゞ合理的
に生活せよ

らであつて、人はすべてかゝる生活をせよと教へたのではない。

人間は各自いかなる程度の生活をなさねばならぬかは、實際その人の財産の多少によつて豫め制限される場合が多い。それゆゑ各、その分に安んじて、徒らに他人の富裕を羨んではならぬ。しかし、いづれの場合にでも、合理的な生活をするといふことは必要である。窮乏生活でもこれを合理的にすれば、相當にその向上を見ることが出来る。不精なために、窮乏でないものが窮乏生活をしてゐる例が少くない。これに反して、贅澤生活と見えるものにでも、それが合理的になされたるので、贅澤といは

合理的
健全な奢侈
と不健全な
奢侈

れぬものがある。

西洋の學者で奢侈を健全なものと不健全ものとの二つに別けて説いてゐるものがある。これは學問上では不徹底な區別のやうでも、實際にはさういふものが存してゐる。衛生上、經濟上また道徳上からよく考へてなされる生活は、たとひ極めて高い程度のものでも、一概に贅澤とはいはれぬ。否、少くとも奢侈としては健全なものといはねばならぬ。歐米國民の生活の程度は、我が國のよりよほど高くなつてゐるが、しかし、それ相當な目的を有つて、隨つて意味がよくわかつてゐる。昔からの例によると、國民の生活の程度が愈、上れば、その國家は反對

大いに反省
を要する

に漸く衰運に傾いたものである。しかるに、今日の歐米諸國就中アメリカなどがあのやうな富裕な生活をしても、この弊を見ることが比較的少いのは、その生活が一般に合理的になされるからであらう。

要するに、最もよい人間の生活は最もよく道理に合ふ生活でなければならぬ。そして道理に合ふ生活でさえあれば、その程度は高いほど愈々よい。もつとも、こゝにいふ高いとは、費用の多くかゝることでなく、その内容の進歩してゐることである。かかる生活は益々これを向上させるべきもので、これをして下させるべきものでない。かかる生活の向上こそは、實に取りもなほさず人間の向上

となるものであることを忘れてはならぬ。たゞし、實際には厳格に批評すると、全く合理的であると思はれる生活は極めて少いものである。例へば、出さねばならぬ費用を出さずにあることもあるなど、道理に合はぬことは必ずしも、吝嗇とか奢侈とかいはれるほどのものにばかりでなく、日常普通の生活のどこにでも澤山に見られる例である。就中我が國民の費澤生活は概して何等の目的もなく最も無意味であつて、どう見てもこれを不健全な奢侈とはいはねばならぬものが多い。そして、この點は、特に我等が將來の國運のために大いに反省して、その弊を改めねば

Ceremony
Etiquette

ならぬものである。

禮儀作法

意義、人間
相互、文際
言語、動作

集團生活と
禮儀作法

一規律ハ集團生活ヲ確實ニシ禮儀作法也、之ヲ円満に行はれぬ。禮儀作法は人間相互の交際上すべての人の守るべき言語、動作に關する一定の形式である。儀作法が必要である。禮儀作法がなければ集團生活は圓満に行はれぬ。禮儀作法は人間相互の交際上すべての人が心のまゝに勝手に振舞へば、互に衝突して、自他ともに不快を感じ不利益を受けるから、集團生活には一定の紀律を守らねばならぬ。しかし、紀律の目的はおもに集團生活の衝突を避けて、その團結を確實にしよ

他事、ひそか
他人情を察す

對人關係と
禮儀作法

うとするのであるから、更に進んでこれを圓満、愉快にするには、その上になほ禮儀作法を守る必要がある。

我等は父母に對し教師に對し、また朋友その他に對して、その位置、身分に應じて、相當の禮儀作法を守らねばならぬ。禮儀作法が守られてこそ、始めて親子、師弟、朋友その他の關係もよく維持され、またその相互の親愛も永く渝らぬものである。親子の間柄でも、あまり狃れ過ぎて無遠慮になれば、往々不和を生ずることがある。まして師弟、朋友の間では、禮儀作法を忽せにすれば、到底その關係を圓満にすることは望まれぬ。就中今日のやうに始終家を出て、廣く社會の人々と交際せねばならぬ時代に

天真爛漫の誤解

青年はやゝもすれば無禮、粗野であるのを天真爛漫と心得るが、実は天真爛漫に見せようとする心ほど天真爛漫を妨げるものはない。(ラ、ロセフ)

於ては、我等は一層よく禮儀作法に注意せねばならぬ。しかるに、青年の間には天真爛漫などと稱して、思ふまま欲するまゝの言動をして、他の迷惑を考へぬものがある。これは天真爛漫の誤解である。天真爛漫とは、徒らに表面を飾つて他人を欺くやうなことがなく、正直に己を現すまでのことであつて、これがために禮儀作法までも無視してよいといふのではない。もし禮儀作法を無視して、謂はゆる天真爛漫の振舞をなせば、必ず相手の不快を買うて、遂には世人に忌み嫌はれるやうになるものである。

文化の華でまたその實

禮儀作法は文化の華で、またその實である。それゆゑ、

禮繁なれば、
實心衰ふ。
(韓非子)

禽獸にはもとより禮がなく、蠻民には禮があつてもその意味が極めて淺薄である。意味の深い禮は文明國民に於て始めてこれを見ることが出来る。しかし、禮儀作法は一つの形式であるから、やゝもすればその魂を失つて、型だけになつてしまふことがある。今日繁文縟禮の改廢を唱へる議論の多いのは、實にこれがためである。禮の本體は動かすことが出来ぬが、その末節は時勢に従つて改めてさしつかへないものである。

禮儀と作法との區別

禮儀と作法とは合して一つの意味をなすが、實際上にはこれを區別することが出来る。禮儀は冠婚葬祭の儀式のやうなもので、その最も大きなものになると、人と人

との交際^{くわい}に止らず、人と神との交渉にまでも及ぶものである。かゝる儀式は單に實用を主とするものでないから、時間や經費の都合ばかりを考へてはならぬ。なるたけその歴史的、道德的の意味を重んじて行ふべきである。これに反して、作法はおもに日常生活に現れて、交際上自他の便利を圖ることを主とするものであるから、實用に重きをおかねばならぬ。隨つて作法には、特に我等の生活狀態の變化とともに改むべきものが多い。

しかし、禮儀といひ作法といつても、いづれもその本は人の心にあるから、その本を忘れず、出来るだけこれを形式の上に現すことを務めねばならぬ。心の現れぬ禮儀

人情尊重
精神
本末
形式

作法專項

一 礼儀作法と其の知能作法

その人の自然の表現であるが、如くに訓練された作法でなければその効果はない。(エマーソン)

作法は謂はゆる虛禮虛儀で、人に好感を與へねばかりでなく、集團生活のためにも不便不利になつて、却つてその發達を妨げるものである。古語に、「禮は敬のみ」とあるとほり、禮儀作法は恭敬の心をもつてその本とせねばならぬ。己を恭しうして人を敬する心を本とする禮儀作法であつて、始めてよくその人間の交際を圓満にしようとする目的を達し得るのである。

二 相互の尊敬

およそ人間には身分、財産などによる差別はいろくあるが、人間であるといふ點に於ては皆同一である。そ

他人の長所
を尊敬せよ

一人であるが故に
六長所を尊重せよ

自らその身を
恭敬せざるも
のは、人の恭
敬を受くるこ
と能はず。
(スマイルス)

のうへいかなる人も必ず何かの長所を有つてゐるものであるから、よくその長所を認めて、互にこれを尊敬し合はねばならぬ。己を侮るのはよくないが、人を侮るのはなほさらよくない。己、人を侮れば、人もまた必ず己を侮るから、己の人に對する尊敬はやがて人の己に對する尊敬となるものである。社會の秩序の亂れる原因は種々あるが、人々の心に相互尊敬の念を缺くことがその最もおもなものである。相互尊敬の念を缺くのは、人々の心に何人も同じく人間であるといふ根本の觀念が明らかでないからである。

今日は家の内外到るところで、職業も思想も違つたい

人間
何人も同じ

ろいろな階級の人々が頻繁に交際して、その關係は頗る複雑してゐるから、いつどこで人に不快を與へて怨を買つてゐるかわからぬ。それゆゑ、各自互に禮儀作法に注意することは、今日では益、その必要を感じるのである。しかもこの禮儀作法はたゞ表面的な辭令の交換をなすだけのものでなく、相互尊敬の精神を本とするものでなければならぬ。單に目上の人に対するばかりではなく、目下のものに對してもまたこの精神を失つてはならぬ。たとひ一部にでも、己の身分に誇つて人を人とも思はぬ氣風があれば、社會の交際は圓滑に行はれぬ。のみならず、これがために階級の間の憎悪がはげしくなる。ス

階級間の憎
悪

互尊の精神

マイルスは、「紳士は著しく己を尊敬すると同時に、同じ筆法をもつて他を尊敬するものである」といつてゐるが、この他を尊敬するといふのは、相手が紳士である場合に限ることでなく、紳士であらうと何であらうと、たゞ相手を同じ人間として尊敬するといふことである。かゝる精神が一般に普及すれば、禮儀作法も心から行はれて、交際上で侮辱を感じる人なども少くなるから、階級の間の憎悪も大いに緩和されるばかりでなく、一國の風俗もおのづから高尚堅實になるものである。

福澤諭吉は我が國近代の偉人として名高い人であるが、平生極めて平民的で、その抱車夫に對してすら頗る丁度の禮儀作法をもつてゐる。それで、車夫の立派な態度を全うするには、必ず他よりも優れた健康と特殊な技術とを有つてゐなければならぬ。それゆゑ、何人でもこの長所を認める以上は、たゞその地位や身分が低いからといつて、一概にその人までも軽蔑するには忍びぬはずである。

福澤諭吉

明治三十一年四月六十九日

福澤先生
中津藩士
天保年
明治三十一年四月六十九日

新島襄
吉田松陰
福澤諭吉

寧な言葉を用ひて、少しもこれを軽蔑する態度がなかつた。随つて車夫も諭吉の誠意に感じて大いに自重し、喜んでその仕事を勵んだといふことである。身分は車夫であつても、苟も己の職務に最善を盡くして怠らねば、人としては立派なものである。そしてかやうに己の職務を全うするには、必ず他よりも優れた健康と特殊な技術とを有つてゐなければならぬ。それゆゑ、何人でもこの長所を認める以上は、たゞその地位や身分が低いからといつて、一概にその人までも軽蔑するには忍びぬはずである。

よし何等取るに足りるやうな長所はなくとも、諺にい

人の魂を認めよ

Judge not a book by its cover.

君子は上に交つて詔はず、下に交つて漢れす。(易經)

ふやうに、「一寸の蟲にも五分の魂」があるから、人に對してはまづその人として有つてゐる魂を認め、これに對して相當の尊敬を拂はねばならぬ。たゞその衣服、風采など粗末なのを見て、漫にこれを侮るやうな人は、必ず弱者に傲つて强者に詔ふものであるから、ともに相互の尊敬などを語ることの出來ぬ人である。

毛道徳

一三 公 德

公德、私徳の區別

道徳の本體は渾然一體のものであるから、これを公と私とに區別すべきものでない。しかし、道徳を實行する場合には相手が個人であるか、または公衆であるかによ

公徳、私徳の別
第三要件
卷三
公徳の別
第二要件
卷二
公徳の別
第一要件
卷一
我が國の禮儀作法は主に對個人的であつて對公衆的でない。知る人に對しては禮を守つても、知らぬ人に對しては禮を守らね。また家庭ではそれが案外に行はれね。それゆく、我國の禮儀作法は個人的から公衆的に進歩させるることは、實に今日の急務である。
遠慮心

つて、多少その心得を異にせねばならぬから、我等はこの點に於て、便宜上公徳と私徳とを區別するのである。例へば、家庭では別に遠慮するに及ばぬことでも、社會に出でては慎まねばならぬ行爲も少くない。今や我等の生活は漸次家庭から社會に延びて、他人と接觸交渉する機會が多くなつたから、我等は家庭の私人としての外、また社會の公人として別にその心得を學ばねばならぬ。今日公徳の必要が盛に唱へられるのは、實にこの理由によるのである。

社會生活に於ては、一面識もない人と交際することがあるから、それについての心得を知らねば、意外な失敗を

在人家を過ぐ
育てて班
人迷惑を承
トモ言を云
上に神を尊
神を尊ぶ
公徳第三要件
第三要件
第一要件
文明国民特色
一、公篤ヲ守ル
二、秩序ヲ守ル
三、人ノ意ヲモテス

彼等(英國人)は實に他人に對して邪魔をし迷惑をかけることのないやうに注意する。禮儀作法について峻厳な訓練を受けたる。彼等は紹介がないのに他人を正面から見るとさへ無禮と考へてゐる。彼等に取つては禮儀を守ることは襯衣を清潔にすることとともに缺くべからざることである。

招くことがある。社會生活は複雑多忙であつて、人の心の底までも一々詮議してゐられぬから、おもに問題になるのは表面の言動である。まづ他人に迷惑をかけぬ言動であれば、あまり非難は起らぬ。もし更に他に好感を與へれば、世人の賞讃を博する。それゆゑ、社會生活に處する第一の心得は、他人に迷惑をかけぬために相互に遠慮をすることである。實に遠慮心は公徳の第一要件である。

公徳の第二要件は公共心である。社會生活に於ては、多くの人と共同し、また多くの公共物を使用するから、他に迷惑をかけぬと同時に、公衆の利益を思ひ、公共物を大

切にせねばならぬ。私人の物を毀せば、迷惑はその人だけに止るが、公共物を毀せば、迷惑は無數の公衆に及ぶのである。例へば、公園の樹木草花などは公衆を慰める目的で植ゑてあるから、これを傷つければ、公衆の樂を妨げることになる。その他、集會、旅館、街路、汽車、汽船などで一人の不心得のために、いかに多數の人の不愉快、不利益を來すかは、我等の平生の経験でもよくわかつてゐるところである。

文明國民の特色の一はよく公徳を守ることである。歐米の都市では市民は公共物を殆ど私物と同一に視てゐる。彼等はよく社會生活の眞意を理解して、なるべく

自他の幸福を増進しようと努めてゐる。彼等の多くは各自に庭園を有するほど餘裕がないから、公園を各自の庭園の代りとしてゐるのである。また三度の食事を家庭でとるのが不便であるから、料理店を各自の臺所の補としてゐるのである。交通機關も彼等は不斷頻繁に使用するところから、他人の物とは思へぬほど親み深くなつてゐる。公共物に對する考もかくまで進歩すれば、ものはや特に公徳の養成を説くには及ばぬのである。

しかるに、私物以外の公共物に對する特別の心得の必要が説かれる間は、公共心はまだ十分に發達してゐないと思はねばならぬ。それゆゑ我等は今少しその眼界を

廣くして、公共物も畢竟私物に外ならぬ次第を考へて、自ら進んでこれを大切にするやうにならねばならぬ。公私の利害の一致するところに、始めて眞に力強い公共心が起り、隨つてこれに基づくところの公徳が成立するものである。

右のやうに公徳といふ言葉は、おもに社會公衆に對する我等の行爲に關して用ひられるが、しかし、道徳的行爲の本は道徳的意志でなければならぬから、眞に公徳を全うしようと思へば、やはり溯つて己の心の修養に努めねばならぬ。社會生活では偽善、眞善を問ふ違がないから、偽善でもさしつかへがないといふのではない。遠慮心

でも公共心でも、心の誠から出るものでなければならぬ。かくてこそ、始めて公徳も道徳の一部として論ずる價値を有するのである。

一四 悪の摘發と善の顯揚

人ハ
改過遷善

「可能性アリ」
「之はよりて修善」
「公然事實を摘要成り立つ」
「發し人の名譽を毀損する」とを禁じてゐる。

惡の摘發

法律に於ても
公然事實を摘要成り立つ
發し人の名譽を毀損する
とを禁じてゐる。

世の中には隠れた惡もあるが、また隠れた善もある。隠れた善を顯揚することは美德であるが、隠れた惡を摘發することは大いに慎まねばならぬ。摘發がその當を得ないと、人を誣ひるばかりでなく、その結果は徒らに世人に不快の感を與へる外、何等の利益もないことが多い。まして人間は一時過を犯しても、また自ら改めて善に遷

るものであるから、苛察にその過を摘發すれば、却つて悔悛を妨げて、益、惡に傾かせるやうになる。それゆゑ、子夏は、「許いて以て直しと爲す者を惡む。」といひ、孔子もまた、「父は子のために隠し、子は父のために隠す、直きことその中にあり。」と說いてゐる。かやうに場合によつては、故意に人の惡を隠すことが、却つて情理にかなふものである。それゆゑ、隠れた惡を摘發するのは、これをそのままに打棄てておけば、社會の公益に害があると思ふ場合だけに限るがよい。

今日の文明國民は、いづれもその交際於て、人の私行を口にすることを禁戒とせぬものはない。私行はその

他人の私行
を口にする

衆之を惡む
之を好む、必
ず察す。
(論語)

善の顯揚

文字の示すとほり人の内密の行であつて、他人はたゞこれを傳聞するに過ぎぬ。眞偽をたしかめずに、たゞ傳聞によつて人を是非することは惡徳である。且他の悪口をいふ人は即ち己の悪口をいふ人であることを思へば、何人でもかゝる人に心を許すことはあるまい。それゆゑ、相互の親みを増さうとする交際本来の趣旨に背くまゝと思へば、人の身上にわたる是非の談話は一切これを避けるがよい。

これに反して、隠れた善を顯揚するのは、たとひその當を得ずとも、社會に甚だしい損害を與へることは少い。昔は僞孝でさへもこれを褒賞して、孝道を奨励したとい

皆人のえらぶ
が上にえらび
たる玉にもき
すのある世な
りけり

ふこともある。まして眞の善行ならば、極めて小さいことでも、これを顯揚すれば、社會の風教に益がある。惡を摘發すれば、惡を懲さぬではないが、また往々却つて惡を挑發することもある。しかるに、善を顯揚すれば、或は時に偽善を奨励する弊は生ずるにしても、つまりは一般社會をして人の善行に注意させることになる。古から「人の過を説かず、人の美を成す」といふことを人間の美德としたのは、實にこの理によるのである。

しかるに、人には利己心や競争心があるところから、他の利益よりもまづ己の利益を圖り、また他を排斥しても己を優者にしようとする傾がある。随つて好んで善を

善の顯揚を
妨げるもの

他の短を擧げて己が長をあらはすこと勿れ。人を誇りて己に誇るは甚だいやしきことなり。
（松尾芭蕉）

顯揚するものが少く、却つて惡を摘發しようとするものが多い。この弊風を根本的に一掃するには、各自の深い反省と修養とによるの外はない。古語に、「人の善を匿すは、これを賢を蔽ふとなす、人の惡を揚ぐるは、これを小人となす」とある。我等はこの教に鑑みて、なるだけ惡の摘發を慎んで、善の顯揚に努めねばならぬ。

一五 同情心

通者生存
自然淘汰
弱肉強食
生存競争
相互扶助
旅は道運、世は情

同情心は求
心力

世の中は一見すれば、人々が互に激烈な生存競争をしてゐるやうであるが、また一面から見れば、互に相倚り相輔けて頗る親密な交際をしてゐるのである。さらば人

をしてかく親密に交際させるものは何であるかといへば、それは同情心である。利己心が遠心力として人間を互に離反させようとするのに對して、同情心は求心力としてこれを互に親近させようとするものである。

同情心の本體は愛である。人の憂を憂へ、人の喜を喜ぶやうな場合に現れる愛を、特に同情心と名づけるのである。諺に「旅は道運、世は情」といふが、この情が最もよく同情心の意味を言ひ表してゐる。苦もこれを分つてくれるものがあれば、苦しい中にも慰めがある。樂もこれを共にしてくれるものがあれば、ひとしほ楽しく思はれるものである。苦にも樂にも人の同情がなければ、人生

あはれげに憂
きときつる、
友もがな人の
なさけは世に
ありしほど
（家語）
人を愛する者
は則ち人もこ
れを愛す。

同情心の本
體

（家語）

弱者に同情
強者に反感

の眞味を味ふことは出來ぬ。我等が人生を樂しく感ずるのは、互にこの同情心を交換するからである。それゆゑもし同情心の交換が行はれねば、世の中は實に何の溫味もないさびしいものになつてしまふ。

同情心は一般に憂に厚く喜に薄い傾向がある。失意の人のためには憂へても、得意の人のためには喜ばぬといふ例がかなりに多い。弱者には同情しても、強者には反感を抱くのがむしろ普通の人情である。これは同情心が公平を失するやうに見えるが、實は必ずしもさうでなく、弱者には同情を得る必要の多いのに反して、強者にはそれが少いからである。もつともゆゑなく強者に反

呪詛の邪念

嫉妬を感じる
のは人間的である、喜害（呪詛）を樂むのは惡魔的である。（シヨツペン ハカエル）

感を抱くのはよくないが、弱者に同情する反動として自然さうなるものと思へば、深くも咎められぬ場合もある。たゞし一概に失意の人を憐んで得意の人を憎むといふのは、結局人の憂は憂へても人の喜^ハは喜ばぬといふことになるから、同情心としては一方に偏したものとなる。かかる過つた同情心が益^カ高じると、かの忌はしい呪詛の邪念を起して、遂には人の憂も憂へぬばかりでなく、却つてこれを喜ぶやうにもなるものである。支那に、「高明の家は鬼常にこれを瞰^カふ」といふ諺がある。これは實際鬼がゐて人の家を窺ふのではなく、この呪詛の邪念が即ち鬼に外ならぬのである。西洋では、人の幸福を嫉んで

人の不幸を喜ぶ邪念を惡魔の心と呼んでゐる。鬼といひ、惡魔といひ、いづれにしてもこの邪念の惡徳であることを言ひ表したものである。

誇張を嫌ふ
同情心

人は仁愛を以て心とし行ふべし。己を愛する心を以て人を愛す。これ仁なり、人の心なり。(貞原益軒)

十分徹底した同情心は、幸と不幸とを問はず、他の心を己の心として、同じく悲しみ同じく喜ぶものでなければならぬ。しかし、眞に同情心の喚起されるのは、やはりその人の一喜一憂が純な場合、即ち何等誇張も他意もない場合である。かかる場合ならば、憂に對してはいふまでもなく、喜に對しても必ず相當の同情心が起るものである。かの強者に對して起る反感は、その幸福を呪詛するのでなくて、その幸福に誇る得意の心持を嫌ふのである。

雅量の特徴

一六 雅量

憂に對してもあまりに同情心を求める過ぎれば、却つてこれを冷却させることさへある。それゆゑ、我等は己の同情心の養成に努めると同時に、漫に他の同情心を求めることを戒めねばならぬ。

雅量の意義

無心淫懲 || 雅量の人

自高慢 || 傾固 || 信ずるの偏狭である。雅量の人はよく人と調和し、その人物も愈々大きくなるが、頑固、偏狭の人は常に人と衝突し、その動機も結果も皆に悪なる

偏狹之人とは遺失と奸惡、邪惡の別を知らずアリを言ふ。即ち動機と結果

喬木と頑石

智德は益、退歩するばかりである。前者の心は成長して喬木のやうに大きくなるけれども、後者の心は硬化して頑石のやうになつて少しも發達せぬ。前者の樂しく世に處するのに反して、後者は一生不平の念に苦しめられる。前者はどこへ行つても味方が多いのに、後者はいつも敵ばかり作るといふやうに、大體に於て幸不幸の差が著しいものである。隨つて雅量の人は世人に敬愛されるが、頑固、偏狭の人は多く世間に孤立してゐる。謂はゆる徳望家は必ず雅量の人であることは、即ちこの事實を證するものである。

しかし、雅量をかの生來大まかな無頓着、無關心などと

徳望家

意志 治經 同情
克己 自制
自利

眞の勇氣と眞の温情とは互に提携するもので、勇者は宏量雅懷であつて決して苛刻殘忍ではない。
(スマイルス)

同視してはならぬ。雅量は思ひやりの心を本とし、忍耐をもつてこれを實行して、始めて養成される一の德性である。雅量の人は漫に人と争はぬけれども、しかし、勇者である、克己、自制の力に富んだ眞の勇者である。それゆゑ、雅量の人は多くの場合には人と調和しても、奸惡に對しては毅然として心に守るところがあつて、決してこれと妥協せぬものである。

人々が雅量に乏しいために、種々の不都合の起る場合が少くない。故なくして起る反目疾視及びこれに原因する議論の不一致などは、即ちそれである。これらは各自分が少しく心持を大きくさへすれば、起らずにすむこと

合議制と雅量

が多い。今日は何事も會議によつて決する謂はゆる合議制の廣く行はれる時代で、帝國議會、府縣會、市町村會はいふまでもなく、會社、銀行などに至るまで、重要な事件は悉くこれを會議にかけて決するやうになり、學校の生徒の間にさへも各種の會があつて、會員の相談で取極（タクキル）をなすことが少くない。もしかゝる場合に、何人も自説を固守して相讓らなかつたならば、會議の圓滿に行はれることは到底望まれぬ。各自が雅量をもつてよく他の意見を聽き、また己の意見をも述べて、徐に相互の一一致點を見出してもこそ、會議のかひもあるものである。しかるに、己の意見が容れられねば不平不満を起し、甚だしきは議決（ディシジョン）の誤り（ミス）である。

の後までもこれを心に含んで、あくまでも我意をはりとほさうとするのは卑怯な振舞であつて、且今日の時勢にも適せぬ行爲である。これは皆雅量に乏しいところから起るのであるから、雅量はたゞに人格の完成に必要なばかりでなく、また一般會議制を有利有効にするためにも必要なものである。

一七 施恩と返恩

恩を受けぬ
ものはない

親の恩、師の恩、君の恩はいふまでもなく、人はこの世に孤立孤行し得ぬ以上、いづれからか必ず相當の恩を受けるものである。それゆゑ、恩を受けることは悪いのでは

自分が世の中
がなくともす
か、自分がな
くては世の中
はすまいと
思ふのは更に
誤つてゐる。
(ラ・ロセフ)
コール

ないが、恩を受けてもこれを返さぬことは善くないのである。一方に恩を施すものがあり、他方にこれを返すものがあつてこそ、始めて世の中に情義の交換が行はれて、その生活に温味も加るものである。独立自営といふことは、なるべく人の世話にならぬといふまでのことである。切他の恩を受けてはならぬといふ意味ではない。ポンプで井戸水を汲むものは、自分の力だけで水を得ると思ふが、その實は空氣の壓力の恩惠を蒙つてゐるのである。これと同じく、己は少しも他の恩を受けぬと思つてゐる人でも、よく考へて見れば、必ず直接にまつは間接に他の世話になつてゐるものである。

守り

孔孟言行
傳

夏
衆生鬼
社會奉
公德
仕

返恩は人た
るゆえん

それゆゑ、恩を受けることの是非は初から問題にならぬ。問題になるものはこれを返すか返さぬかといふ點である。一方に恩を施すものがあつても、他方にこれを返すものがないとすれば、その結果はどうであらう。君親の恩に對してこれを返す臣子がなければ、君親、臣子の名はあつても、君親、臣子の實はあるまい。恩を受けてもこれを返さねば、畜生と違はぬといつてよい。

しかし、恩を施してその報酬を求めるのは恩を賣るもので、恩を受けてこれを返さぬのは恩を盜むもので、いづれもよくない。恩を施すものは、これによつて善を行ふといふ樂を感じるはずであるから、既にその善行は報い

恩を賣り恩
を盜む

独立立行
恩徳無
心の負債

忘恩といふ惡
魔の心は大理
石のやうに冷
れい。特にそれ
が子供の心に
現れると、そ
の見苦しい
やらしいこと
は、海中の怪
物にもまさ
(シェーケス
ピア)

務と権利、義
務、施恩、返恩
と権利、義

られてゐる。それ以上になほ報酬を求めれば、却つてその施した恩に利息を付けて返してもらふことになる。これに反して、他から恩を受けて返してもこれを返さねば、その人の負債はいつまでも残つてゐる。たゞし、こゝにいふ負債は物の負債ばかりでなく、心の負債をも含んでゐるから、返さうと思ふ心さへあれば返し得られるものである。しかもなほこれを怠るのは、畢竟人の恩を借りたのでなく、これを盗んだのである。一方では恩を賣り、他方では恩を盗むやうなことは、人間の情義的關係を破壊するものである。

しかるに、近來世の中は情義的關係ばかりでは却つて

弊害が起るから、これを権利、義務の關係に改めるがよいと論ずるものもある。権利、義務の關係は法律の規定に従ふもので、例へば、金を貸したものはこれを支拂はせる権利があり、金を借りたものはこれを辨済する義務があるといふやうなものであるから、施恩、返恩のやうな情義的關係までも、一切法律的に處理しようとすれば、世の中は恰も油の切れた車輪のやうに常に軋轔^{あつひき}の起ることを免れぬ。かうなれば自他の不快、不幸は實に限らないであらう。元來恩を施すも自然の人情、恩を返すもまた自然の人情であつて、別に教訓によつて特にかゝる人情が出來たわけでないから、我等の心掛次第では、永くこの施

情義的關係

恩、返恩の情義的關係を維持して、世の中を楽しく過すことは必ずしも不可能ではないのである。

無我の天地

一八 氣韻と我が國民性

利害損得の關係を忘れて、自然の風景を眺めたり、繪畫を見たり、音樂を聽いたり、詩歌を讀んだりする時の心は、高雅純粹であつて、少しの汚點もとゞめぬものである。たゞにその心ばかりでなく、その表情までも品よく見えるものである。それゆゑ、我等は時々利害打算の念を棄てて、心を無我無欲の天地に遊ばせるがよい。

世に氣韻といふ言葉がある。趣味的な、そして高い調

氣韻とは何ぞや

子といふやうな意味である。いかに學術に秀で手腕に優れた人物でも、氣韻のないものは、どことなく卑しく感じられるものである。氣韻はその人に特に具つてゐるものであるから、高位顯官の威光でも巨萬の財貨の勢力でも、こればかりは奪ふことも購ふことも出來ぬ。氣韻は必ずしも藝術家もしくは藝術を好む人が有つてゐるものとは限らぬ。時には藝術を好み人に却つて多く氣韻の存してゐるのを認めることがある。しかば、氣韻と藝術とは兩立せぬかといふに決してさうではない。氣韻のある人は、心に一種の藝術的趣味を有つてゐるが、これを藝術に現さずに入格に現すから、たとひ藝術を愛

氣韻と藝術

青年の氣韻

せどとも、これを愛するものと同じく、その心には利害損得を超えた無我の天地があるものである。

人生は奮闘である、生活の安全を圖るのがその目的であると考へてゐるものもあるが、これはまだ人間の眞價を知らぬものである。人間の心には、財貨以上の理想に對する追求の念も潜んでゐる。就中青年にはこの念が最も盛で、自らはその内容の如何を知らずとも、ともかく一種詩的な理想を求めてゐる。その好んで架空の小説を讀むのは、かゝる追求の念に驅られた結果に外ならぬのである。

我が國は大詩人を有する點では、支那にも印度にも及

辭世の歌
武士の嗜

ばぬ。特に歐洲諸國には尙更遠く及ばぬ。しかし、氣韻は我が國民の生活に徹底してゐるから、國民の多數は皆小詩人である。しかも詩を作る詩人でなく、詩を實行する詩人である。詩としては見るに足るもののが少いが、我が國には昔から辭世の歌といふものがある。今はの最期に臨んでその志を詠む風習は、我が國民特有のものであつて、外國には殆どその例がない。

我が國民の趣味的生活は、かの攻城野戰を職とした武士にも及んで、氣韻はその間に最も尊重され、討死の間際にも、その死にざまを美しくしようとまでした。齊藤實盛は見苦しい白髮首を敵に渡したくないといふので、頭

みやび好むも
の今の世には
いと多かれ
ど、いづれを
まことのみや
びとはいひ定
めん。もの
ふならば、か
の櫻横たへて
漢詩よみ、弓
に矢はげて歌
よみしなんど
は、まことの
みやびなるべ
し。

降伏の禮式

髪を染めて戦場に出た。木村重成は死後に武士の嗜を忘れたと笑はれぬために、兜の裏に香を焚きこんで出陣した。かかる風習は今日にも傳はつて、日清、日露等の戦役にも、我が軍人は多くかかる種類の美談を残してゐる。支那では、昔から戦争に際して時には降伏するものと考へて、その禮式のやうなものまでも定められてあつた。しかるに、素車白馬、面縛して敵の軍門に降るなどといふやうな醜態は、我が武士のなすに忍びぬところであつたから、我が國では、已むを得ねば白旗を掲げるくらいのことはあつたが、降伏の禮式のやうなものは無論なかつた。

切腹

我が國民性を理解することの出来ぬ西洋人は、我が國

に、切腹にまで一定の儀式のあるのを怪しからんことと思つてゐるが、これは我が武士道は一種の趣味をその要素とすることを知らぬからである。死といふ人生最大の危機に際しても、尙且人に見苦しいさまを見せまいと思ふその心の餘裕は、いかにも尊いものではないか。

とにかく我が國民の趣味は、たゞ謂はゆる藝術だけに現れず、その生活全體に浸みこんで、しかもその強い力は臨終までも支配するのである。我が國民性は一種特別のものであるといふその一つの原因は確にかかる點に存するのである。我等はよくこの國民性の特徴を失はずに、益々高尚にして氣韻のある國民になるやうに心が

ければならぬ。

一九 愛郷心と愛國心

我等が呱々の聲を揚げてから、その少年の時期を送る土地ほど、我等の心に深い印象を留めて、永く我等を引きつける力をもつてゐるものはない。謂はゆる愛郷心は、即ちこの強く引きつけられる心で、郷里はこの點に於て生みの親に似てゐる。我等は生みの親を忘れぬやうに、その生まれ故郷をも忘れ得ぬものである。

しかし、郷里の意味は、他に對する關係で狭くも廣くも取れるものである。他の村に對しては己の村が郷里で、

愛郷心は愛國心の中心

生まれ故郷
太陽に向つて咲く花は、高くなればなるほど、愈々深く彼を培ふ土地の中にはその根を下す。
(ヘイシ・ケリ)

他の縣に對しては己の縣が郷里で、他の國に對しては己の國が郷里である。廣い意味の郷里である國に對する愛郷心は、特にこれを愛國心と名づける。愛國心の中心となるものは狭い意味の愛郷心であるが、しかし、愛國心は愛郷心よりもその内容が頗る複雑になつてゐるから、その養成には相當の教育と経験とを要するものである。廣狹いづれの意味に於ても、愛郷心は人の心を支配する力の極めて強いものである。昔、阿倍仲麿は唐朝に仕へ、高官をもつて優遇されたが、常に故郷を忘れることが出来ず、三笠山の月を詠じて懷を述べたといふ故事は、我等の夙に知るところである。他郷にあつていかに榮華

愛郷心は一生を支配する

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にも出でし月

(阿倍仲麿)

スイスの
青年とその
叔父の訓戒

な生活をしてゐても、一度思を故郷の空に馳せると、飛んでも行きたい思が起るものである。ドイツの詩人シルレルの作に、ウイルヘルム・テルといふ有名な劇がある。これはテルといふ愛國者を主人公として、スイス國民がオーストリアの虐政から脱しようとする義舉を脚色したものであるが、その中に、祖國に背いてオーストリアの朝廷に仕へて得意になつてゐる輕薄なスイスの一青年がある。愛國者であるその叔父が瀕死の病牀での青年を戒めた言葉に、「今に迷の夢が醒めたらこゝの牧童の歌が戀しくてたまらなくなるぞ」汝はその身を貴い祖國に結びつけて、これと離れるな。そしてこれを汝

の全き心をもつて守れ。汝の力の強い根柢はこゝにある。よその國では汝は孤立して、恰も強い風毎に摧き折られる葦莖のやうなものであるぞ」といふことがある。そして、この言葉は大いにドイツ國民の愛國心を燃え立たしたといはれてゐる。劇の筋によると、その青年は後果して迷の夢から醒めて、郷里に歸つて義士の仲間に入つたといふことになつてゐる。かやうに愛國心は殆ど人の心に生みつけられてゐるやうでも、時としては目前の名利のために惑はされることもあるから、各自その涵養を怠つてはならぬ。

國民の名譽の
ために彼のす
べてのものな
欣んで抛ち得
ねものは國民
の資格がない。
(シルレル)

愛郷心と慕
郷心、愛國心
心と憂國心

は積極的でなければならぬ。その消極的なものは、我等はこれを慕郷心または憂國心と名づけて前者と區別したい。たゞ故郷が慕はしいといふだけの心は動物にもある。支那の古詩に「胡馬北風に依り、越鳥南枝に巣ふ」といふのは、即ちその例である。かゝる消極的なものでは、愛郷心も愛國心もあまり實際の用をなさぬから、我等はこれを積極的のものになさねばならぬ。例へば、眞の愛郷心はたゞ郷里を慕ふばかりでなく、進んでその位置の向上を圖るといふ積極的勇氣を伴なふものでなければならぬ。己の郷里は貧乏で將來の望もないから、他の地方にでも移住しようといふやうな考は、一種の賣國的根

性である。貧乏の郷里であればあるほど、どうかしてこれを富裕にして、村はこれを町に、町はこれを市にもしたいといふ親切熱誠な心であつてこそ眞の愛郷心といへるのである。

今日世界の有名な都市の繁榮は、天惠によりもむしろ人力に負ふところが多い。即ち多くはその住民の努力勤勉の結果である。英國のグラスゴーは「勤勉の都市」と呼ばれてゐるが、實はグラスゴーばかりでなく、西洋諸國の都市は殆どすべて勤勉の都市といつてよい。そしてその努力勤勉の原因は、實にその住民の積極的愛郷心に存してゐるのである。

積極的愛國
心が大切

國家に對しても我等は決して憂國心だけで満足してはならぬ。かの國運の振はぬのを憂へて涙を流すほどの人の心は尊ぶべきはあるが、しかし、たゞそれだけの心では、國家を盛にすることは出來ぬ。國家は我等の國家である。これを愛する我等は宜しく自ら進んで各、その分に應じて、そのなし得る限を盡くして、これが隆興を圖り、また場合によつてはその危機を救ふ覺悟がなければならぬ。

二〇 義勇奉公

護國の任務
は一般的

我等が愛國心を最も強烈に發揚する場合は、義勇公に

兵は不祥の器
なり、天道こ
れを惡む。已
もを得ずして
これを用ふ、
これ天道な
り。(三略)

奉ずる戦時である。戦争は人間の最大慘事であるから、出來得る限これを避けるべきは、正義人道上もとより當然のことである。しかし、戦争は避けるべきであるから、我等には義勇奉公の責任はないと思ふのは誤である。我等はどこまでも萬一の場合には進んで國家を防衛せねばならぬ重大な任務を負はされてゐる、否、自ら負うてゐる。武家政治が廢されて王政復古となつた以來、文武一途、海内を擧げて皆兵」といふ建國當初の制にかへつて、護國の任務は少數の武士から一般の國民に移された。しかもこの任務は徵兵令で國民に負はされたばかりでなく、今日では國家觀念に覺醒した一般國民は他から命

令がなくても、必要な場合には自ら進んでこれを盡くさうと覺悟してゐる。隨つて今日では義勇奉公の精神も軍人といふ特殊の階級に専有すべきものでなく、國民一般の共有すべきものになつてゐるのである。

國民皆兵の主義から見れば、軍人とは單に國民の武装した場合の名稱に止り、國民の外に別に軍人といふ特殊な人間はないはずである。隨つてまた軍務以外の各種の職業は特殊職業であつて、軍務は國民の普通職務であるといつてよい。男子は悉く醫師であるにも及ばぬ、辯護士であるにも及ばぬ、また教育家であるにも及ばぬが、しかし必要な場合には皆軍人であらねばならぬ、否、少く

軍務は國民の普通職務

も一度は軍人となる覺悟を有つてゐなければならぬ。國民は各、その特殊職業によつて國家のために盡くさればならぬ。さればといつて、己は金錢をもつて或は學問をもつて國家のために盡くすから、戦争だけは軍人で引受けでもらひたいといふことは出來ぬ。一旦緩急のある場合には、義勇奉公の責任だけは何人でも皆直接にその身をもつてこれを果さねばならぬ。これだけは決して他人に代理させることの出來ぬものである。

それゆゑ、義勇奉公の精神はこれを一般に普及させねばならぬが、しかし、たゞこればかりを偏重してはならぬ。この精神は國民精神の要素ではあるけれども、無論その

總べてではない。義勇奉公の精神さへあれば、その他のものはなくともよいと考へてはならぬ。義勇奉公の精神はどこまでも國民精神の一面である。しかし、この一面は國民の誰にも備つてゐなければならぬ。この一面が誰にも備つてゐれば、たとひ陸海の軍備はその外觀が盛でなくとも、それがすべての國民の精神に準備されてゐるから、いざといふ場合には國家の防衛は十分に行はれるのである。

元來國家の軍備は、恰も獸には爪牙、鳥には觜距、魚には鰭鱗があるやうに、國家には自然に備つてゐなければならぬものである。隨つて軍備は制限しても撤廢するこ

精神的軍備

平和を欲せば
戦争に備へ
よ。ヨーローマの
古諺

とは出來ぬ。しかし、眞の軍備としては、たゞ銃砲艦艇を多く造るよりも、むしろ大いに義勇奉公の精神を養つて、萬一の場合に備へることが一層大切である。そしてかかる精神的軍備は、今日のやうに平和主義の力説される時代にでも、決してこれを怠つてはならぬものである。

一一 明治天皇（上）

明治天皇は實に崇高雄偉の御人格にました。御在位四十七年間に、我が帝國が東洋の一小島國から一躍して世界の強國の一となつたのは、悉く天皇の賜である。こゝに至るまでの経過を顧みると、我が帝國は數次危機

神明優越の力

事實が天皇の御人格を語る。

に際したこともあつたが、幸に天皇の聖斷によつて、何等の蹉跎もなく、國運は愈々堅實に發展したのである。しかもこの發展は物質、精神の兩方面にわたり、且文武いづれにも偏するところなく、よく天皇の高大圓滿な御人格を表現するものであつた。要するに、我が明治の國運は、實に一種神明優越の力によつて指導されたので、かく迅速にまた殆ど完全に近い大發展をなしたのである。

明治天皇の御人格は、外間に洩傳もんたつへられた平生の御起居や數多の御製などで想像し奉ることも出来るが、それよりも御治世四十七年間の我が國家の進歩の成跡こそ、最も明白に天皇の御人格を事實の上で語るものである。

世界はこの進歩の成跡と、並にこの成跡を遺したまうた明治天皇とを併せて、一種の人間の驚異と見てゐる。

近世史上では世界に多くの英主が出てゐる。ドイツ帝國を再建したウイルヘルム一世や、イタリーを統一したヴィクトル・エンマヌエルはその中の最も著明なものである。そしてこれらの英主にはいづれも非凡抜群の人傑があつてその事業を補佐し、しかもその補佐者的人物は君主よりも大きく、またその盛名も君主の上に出でる。ビスマルクのウイルヘルムに對する、カヴァールのエンマヌエルに對する關係は、即ちそれである。特にドイツではビスマルクのウイルヘルムであつて、ウイル

近世史上の
英主と明治
天皇

明治天皇と
維新の三傑

ヘルムのビスマルクではないといはれたほど、一時はビスマルクの威勢がよかつた。しかるに、我が國では謂はゆる維新の三傑などでも、明治天皇の大人格とはもとより比較にならぬ。彼等は皆精忠を勵み、勳功も多かつたが、しかし、結局は彼等が天皇を大きくし奉つたのでなく、むしろ天皇が彼等を大きくしたまうたのである。三傑の後にも幾多文武の名臣が輩出して、各、よくその才を伸べその能を盡くして、國家のために盡瘁した。しかし、彼等は皆恰も遊星が太陽の光を浴びながらこれをめぐるやうに、天皇を中心と仰いでその覩慮のまゝに働くいたのである。天皇は實に人を知る明鑒と人に任ずる宏量と

理想の帝王

を併せ備へたまうた理想の帝王でましくたのである。

明治天皇御製

古の文見るたびに思ふかな

おのが治むる國はいかにと

二二 明治天皇(下)

明治の初に横井小楠が天皇に拜謁を賜はつた時の感想を書いたものに、主上日々御出座、議定、參與を召出され、萬事聞召され候。(中略)御容貌は御長顔、御色は淺黒く在らせられ、御聲はおほきく、御背もすらりと在らせられ候。御器量を申しあげ候へば、十人並にも在らせらるべきか、

横井小楠の
感想

並々ならぬ
御英相

天成の英主

たゞく並々ならぬ御英相にて、非常の御方、恐悦無限の至に存じ奉り候。とある。これは維新後間もない時のことをであるから天皇はその御齡がまだ二十歳に達したまはなかつたのである。しかるに、その人に與へたまうた印象は既にこのとほりであつた。明治天皇は實に天成の英主でましくたのである。さればこそ、

四方の海みなはらからと思ふ世に

など波風の立ちさわぐらん

あさみどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

といふやうな到底尋常歌人の思ひ浮べることの出來ぬ

高く大きく神々しい調子の御製も、自然に遊ばされたのである。

世界に欽仰
された天皇
の御人格

明治天皇の御人格は、我が國民だけが仰ぎ見るには、あまり宏大に過ぎる感がある。天皇の御人格は實に世界に認められて、世界各國民の齊しく欽仰して已まぬところである。天皇の崩御の報に接して、追慕哀悼の聲は世界の到る處に起つた。今その中の著しいものを擧げれば、イギリス第一の新聞ロンドン・タイムスは天皇の崩御を弔し、深く悼惜の意を表して、「もし陛下にしてその勳業に伴なふほど偉大に見えさせたまはずとせば、そは陛下の御謙讓なる、夙に誇銜的行動を惡みたまふが故なり。」と

天皇崩御と
タイムスの
弔詞と讃辭

いひ、「仁愛は陛下の御性格に於て顯著なる一特質なり」といひ、陛下は眞に帝王たるの資質を有したまへりといふべく、その人物の鑒識に於て曾て誤りたまへることなし」といひ、「東洋に於ける最初の立憲國の君主にして、またよくあらゆる立憲國君主のために好箇の模範となりたまへり」といひ、陛下は偉大なる時代に於ける偉大なる統治者におはしき。世はいかに變りゆくとも、陛下の御芳名に至つては、永遠青史に赫灼たらんなどといつてゐる。

またフランスの有名な新聞に散見する天皇に對する讃辭の中には、「陛下は萬能なる魔術師とも申さるべく、明治元年まで中世時代の國の如く遺存したる日本をば、世

界的大強國と成したまへり」といひ、國民の啓導者たる非凡絶倫の大英主は、他の列強國民が數百年を経過し来る途を、日本には僅々二十五年を出でずして経過せしめたまへり」といふやうな類が多い。その他、アメリカなどの新聞にも、いかにも天皇の御人格に極めてふさはしいと思はれる雄大な讃辭が多く掲げられた。「陛下は國民の中心、日本の太陽、その國家的綠門^{アーチ}の礎石たり」といふやうなもの、または「陛下は新日本の旭日にして、東洋に於ける絶大なる覺醒の主因をなしたまへる一大精神におはしき」といふやうものの外、なほ多くの剣切な讃辭がある。

世界をあげ
て天皇の御
仁徳をたゞ
へた

特に多數の新聞紙が殆ど一致して、明治天皇の御仁徳をたゞへ奉つてゐるのを見れば、天皇の御人格のいかに世界に敬重され、且その好影響のいかに廣く及んでゐたかがわかるので、我等は實に快心に堪へないのである。我等は常に天皇の盛徳大業を憶うて、叡慮に應へ奉ることを忘れてはならぬ。

明治天皇御製

とがあらばわれを罪せよ天つ神

民はわが身の生みし子なれば

(をはり)

四
大正十一年度臨時定價
金五十四銭

本教身修學中制新 錢拾參金價定卷三第



有所權作著

大正十一年十月二十三日印 刷
大正十一年十月二十六日發行
大正十二年一月四日訂正再版印刷
大正十二年一月七日訂正再版發行

著作者 湯原元一

東京市小石川區小日向水道町八十四番地

發行兼印刷者

株式會社

東京開成館

代表者

渡邊良助

東京市小石川區小日向水道町八十四番地
【振替貯金口座】東京第五參貳貳番

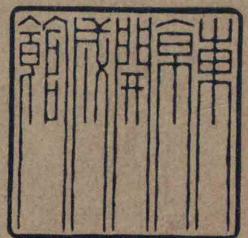
大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角

販賣所 林平次郎助

東京市日本橋區敷寄屋町九番地

M. SHIMADA

三甲
島田正之



三甲
島

M.SHIMADA

広島大学図書

2000066639

